

# 児童文学批評というたおやかな流れの中で ①

— 八〇年代児童文学は一つの事柄を二つの作品で語ることから始まった。 —

細谷 建治

\*『ぼくらは海へ』から『あやうしズッコケ探険隊』へ  
八〇年代児童文学は一つの事柄を二つの作品で語ることから始まった。那須正幹『ぼくらは海へ』（偕成社 80年2月）の結末から『あやうしズッコケ探険隊』（ポプラ社 80年12月）の冒頭への流れが、それだ。

『ぼくらは海へ』という作品へのコミットは、これが初めてではない。「ふたたび、ぼくらは、どこへ」（『季刊児童文学批評』第三号 82年3月）、「海のイメージ」（『季刊児童文学批評』第六号 83年8月）などで語ってきている。また、二つの作品の《結末から冒頭へ》の流れについては、「二つの風景・二つの家」（『日本児童文学』95年12月号）の最後の方で、かなりストレートに語っている。だから、重複する語り口になるかもしれない。が、ここが、ぼくにとっての八〇年代児童文学の出発点であり、この連載の出発点でもある。ということ、強引に語り始めたい。  
『ぼくらは海へ』は、塾へ通うエリート少年たちが、その

途中の埋め立て地で、シーホース号という船をつくる物語だ。船をはじめは「細長いかんおけのような木の箱」だったが、新しい仲間も加わり、だんだんと大がかりになる。しかし、一人の少年の死によって、学校の知るところとなる。校長の長い説教のすえ、船つくりの“遊び”は終わりをむかえる。

しかし、二人の少年だけは船をつくりつづけ、海へ出る。ラストは、いっしょに行かなかった少年が、埋め立て地の手前で、二人の少年が帰ってくるのを待っている場面だ。

でも、ちかごろ、雅彰は、もうふたりはうめ立て地にもどってこないかもしれないと思うようになっていた。どこか南の夢のような島に上陸して、ロビンソン・クルーソーみたいに胸のわくわくするような冒険の日々を送っているのかもしれない。

そして、もしかしたら、自分だって、彼らとともに冒険